

各務原市移住・定住推進PT会議（第6回）議事要旨

（田中副市長より）

4月のPTの発足以来、約半年かけて世界観の形成を行ってきた。メンバーが更新した世界観の資料を見て、「施策を先に考えなかったこと」自体が、このPTの成果の質を大きく高めた要因の一つであると感じた。

最初にキャラクターを作り、類型化し、その後に一人ひとりの世界観をかなり丁寧に掘ったことで、主人公が単なる「設定」ではなく、行動し、迷い、感じ、暮らす人間になってきた。この段階まで来ると、主人公は「政策を当てはめる対象」ではなく、「政策を評価する側」になる。「この制度があるか否か」ではなく、この人は本当に動くのか、この人はこのまちを選ぶのか、この人の一日は本当に変わるのか、と問えるようになる。

仮に最初の段階で移住施策を考えるようにしていた場合、住宅補助、就職支援、子育て支援など既存行政施策の延長線上のものしか出てこない。もちろん、それ自体は必要ではあるが、誰のどの人生をどのように変えるのかという軸がないので弱い。今回は人間を先に作り、暮らしや欲しているものを考えるという逆のアプローチをしているため、施策の立案に意味が出てくる。これは政策形成として非常に健全であると考えている。

施策パッケージ化を後にしたことの最大の意味は、今後施策パッケージを考える際に、「施策をつくる」のではなく、「自分がつくった主人公の人生をかたち作る」という感覚で考えられることである。自分が何週間もかけてつくった主人公だから、「これは彼には刺さらない」「彼女にはこの制度だけでは足りない」と、かなり厳しく見られるようになる。つまり、主人公が施策のフィルターになるということである。単に「ユーザーの課題を把握する」のではなく、その人がどんな人生を送りたいのかまで描いている。そのため、「困りごとを解決する政策」だけでなく、「望む人生を実現する政策」へ行くことが可能となる。

今回のPTは、「施策を考えるために人を作った」のではなく、「人を深く理解した結果として、必要な施策が見えてくる」ところまで来たもの。そして、今後はここから施策パッケージ化へと進みながら、逆に施策の側から主人公を見る。するとまた、この人はこんなことも考えるはずだ、この場面も必要だ、というように皆が考えた世界観が育っていく。つまりこれからは、人物→世界観→施策→人物→世界観という循環に入っていく。この循環こそが、今回のPTを単発の企画ではなく、「若手中心の各務原市役所独自の政策形成方法」にまで育てていける可能性がある。

必要となってくるのは、想像力。最初から「移住施策」という横串を刺さず、まず一人の人間を作り、具体的な人間を想像したから、初めてこの人には何が必要なのか、と問えるようになった。これは行政のアプローチの順番として非常に大切な視点だと私は考える。大切なのは、「その人の立場」から状況を理解しようとする。想像力と共感を出発点にしながら、最後は行政官として冷静に制度へと翻訳する。類型化は「人をまとめるため」ではなく「人を見失わないため」である。

1. 施策パッケージ設計とプロモーションについて

今まで話してきたことの繰り返しになるが、今回メンバーが作り上げた「世界観」を踏まえ、これからはそれぞれのキャラクターが求める人生の価値観と、本市の市民サービスの各施策がどのように接続するのかを考えていく。その際、メンバー各々の出身の部課の所掌にとらわれず、メンバー全員で様々な分野の市民サービス施策を改めて見つめ直してもらいたい。

2. プロモーションを見据えたスケジュールについて

この半年間で移住定住のアプローチが大きく変化してきており、他自治体のことを既に調べ上げているため、特に不要であると感じている。

まずは既存の政策を見直すこととし、新規政策の開発に係る事業予算を計上する予定はないが、シティプロモーションに係る経費は企画広報課にて予算要求を行う。4タイプのオムニバス形式を想定していたが、世界観の資料を見て、全員分のオムニバスを作成してもよいと考えている。

3. その他

各務原映画祭実行委員会のもと、上映会の開催を予定している。各務原映画からインスパイアを得てほしい。ゴザレの杜で各務原を舞台とした2作品を鑑賞後、監督との意見交流会を開催する。

来年4月に新規採用職員が入庁するため、5月頃に追加のメンバーを募集したいと思っている。市民一人一人の目線に立って、本当に必要なサービスは何かを吟味したうえで、市役所としてのサービスを作り上げるという文化を若手職員の手で作っていききたい。

(メンバーの意見)

○今まで技師としての目線で業務を行ってきたが、この半年間のプロジェクトを通して新しい頭の使い方をしていると感じた。福祉、子育てという目線に立てたことがすごく有意義であった。広い視野を持ち、自分の考え方をブラッシュアップするため、担当外の業務についてもより関心を持って取り組んでいきたい。

→市役所の職員であれば、一人の行政の視点として物事を考えてほしい。例えば水道の仕事であっても、地下水をきれいにした水を飲んでくれる市民がいる。その人に寄り添う気持ちを忘れず業務に励んでほしい。

○OPTの当初に行った既存施策の調査、現状のまとめ作業などは行政らしい仕事だと考えていたが、主人公を設定して世界観を作成し、想像力を膨らませるというのが新鮮で、非常に刺激的だった。他部署の職員とも交流することで、自分が狭い世界の中で仕事をしていたのだと気づいた。

○新人でこのPTに手を挙げるのは勇気が必要だったが、このプロジェクトに憧れがあったので立候補した。同期からもこのPTについて質問されることも多くあり、結果として周りに興味や影響を与えているということが良かったと感じている。追加募集の際には、勇気をもって一歩踏み込むことが必要だということを伝えたい。

○自分には誰にも負けない郷土愛があると自負している。人物像の作成の過程で、子どもころの感覚に立ち戻って考えることが多い。ふとした時に各務原っていいところだと気づく時があり、その魅力を改めて様々な世代の人に広めていきたい。

○この半年間の活動があっという間に感じた。自由な角度から考えることが自分の特性と合致していたように思う。他課の施策をあまり考えたことがなかったが、今後触れていけるということをとっても楽しみに感じている。

→施策パッケージは再生と補完を繰り返して出来上がっていくもの。一旦壊すという行為はとても勇気があるものだが、ぜひチャレンジしてほしい。

○この移住・定住推進PTを通して、各務原市の理解がまだまだ不十分であるということを再認識できた。仕事の範疇外のことは自分から情報を掘みにいかないと理解できないため、今後も意識を高めていきたいと思う。

○このPTに入った当時は、市にない施策を考えることだけを意識しており、真に市民に利益がつつながら施策となるのかまでは考えられていなかった。今後、施策パッケージの段階に入れることが楽しみであり、自分のレベルを高める機会にしていきたい。

→行政として一定の目的が入ってしまうのは仕方のないことである。施策が市民向けであっても企業向けであっても行きつく先は人であるということを意識してほしい。

○自分は各務原市が好きで市役所に入庁し、このPTにも加入した。その結果、各務原市には自分の知らない魅力がたくさんあることに気づけた。しかし、市外に住んでいる人にはそれが伝わっていないように感じるので、プロモーションでは「伝える」ということを特に意識して取り組んでいきたい。

○このPTには純粋に「おもしろそう」という動機で入った。現状の各務原市は市民に対して何が

(各務原市移住・定住推進プロジェクトチーム)

令和8年9月29日

提供できて、何が足りていないのかということはこの PT で学ぶことができた。細かい目線で市のことを見られるようになったのは自分の成長だったと思う。

(田中副市長より)

12 月頃に施策パッケージの一定の形を作り上げたいと思っている。10 月末ごろには施策の方向性を教えてほしいため、集まれる機会があれば勉強会を開催してほしい。新しい気づきが得られることを期待している。

次回プロジェクト会議（第 7 回）：10 月 27 日 10:00～ 於 本庁 3F-1 会議室